

15 加藤貞雄氏の『遠州横須賀城の編年』を加筆及び校訂

筆 者 岡田 昇



復元された本丸櫓門跡と玉石垣



往時の面影を残す三日月池(堀)



復元された土塁と天守櫓礎石



復元された本丸下の玉石垣

遠州横須賀の旧城下も行政区画の拡大から、今では大須賀（おおすか）^㉑と地区の名を改めたが、江戸幕府や江戸時代の昔を語るのには、横須賀（よこすか）^{とな}と称えないとふさわしくない。本文中に書く地名はすべて旧来の^{まま}俚を用いる。古い文書の中には横砂ともあり、横寸賀や横須加と書かれたものもあるが、城の築かれる前の横須賀は、^{さんじゃいちば}三社市場という馬継ぎの宿場町であったと伝えられるが、それも永く続いた応仁の乱世（応仁元年〈1467年〉～文明9年〈1477年〉の約11年）に荒廃して、わずかに面影をとどめているに過ぎない寒村（貧村）だったのであろうと想像する。

註記① ^{おおすか}「大須賀」・・・大須賀村（明治22年誕生）、大須賀町（昭和31年誕生）

由来として、横須賀城は徳川家康が^{たかてんじん}高天神城を攻略・奪還する目的に備えるために築いた目付け城（偵察目的の城）だから、発端として高天神の戦いのことを前書きとする。

おがさわら よ はちろう ながただ うじすけ
天正2年(1574)、小笠原与八郎(長忠、氏助)を城主とする高天神城を甲斐(山梨県)の武田
氏に攻略された浜松の徳川家康は、遠江浅羽ノ庄(袋井市浅名)の馬伏塚の砦に拠り、
こしたんたん だっかん ねら
虎視眈々として奪還の機を狙っていた。天正4年(1576)3月、高天神城へ兵糧を入れるた
め武田勝頼が軍を動かし横須賀附近で家康と対陣したが、勝頼は重臣の高坂弾正昌信(虎綱、
たけだかつより こうさかだんじょうまさのぶ とらつな
武田四天王の一人)の諫めをうけて、穏やかに軍を甲府へ返したので、戦いを交えるに至ら
なかった。次いで天正6年(1578)11月、勝頼は二万の兵を率いて横須賀に迫り、家康も
さんじゃやま はら
八千騎を従えて三社山に陣を張り、風雲を孕んだが、この時も決戦には至らなかった。更に
天正7年(1579)3月、勝頼は再び高天神城に出張り、その手兵が屢々出沒したが、交戦
で ば しばしばしめつぽつ
はなかった。このような状況に終始したから、横須賀近辺に戦跡として伝わる場所はないが、
し さんじゃやまじんえい みくまのじんじゃ いただき のこ
家康が本陣を布いた三社山陣営跡は、現在の三熊野神社の背後山の頂に遺っている(正式
な場所不詳)が、ここに登れば浅羽庄一帯から遙か菊川尻へかけての平野を俯瞰することが
あさばのしょう はる きくかわじり ふかん
できる。この陣中で、家康が点茶の水を汲ませたと伝えられる「鶴ヶ池」の所在は探ること
てんちゃ つるがいけ
が出来ない。

これより先、天正3年(1575)、長篠(愛知県新城市)の合戦の時、武田勢に対して織田・徳
川の連合軍が初めて用いた鉄砲の威力は武田勢に致命的損害を与えたが、高天神の役(城攻
略戦)の時にも、徳川方は盛んに鉄砲を用いたらしく、この時以来、沖之須(横須賀城下の
てっぽうやま
東南方)には鉄砲山(俗称…てっぽう、沖之須東方)の地名を残し、高天神山麓に近いところ
には、この時の鉄砲を今に保存する民家があるといわれている。(現存は未確認)

さて、高天神城への攻撃のため、横須賀築城を企図した家康は、天正4年(1576)、その臣
まむしづか おおすかやすたか さんじゃやま えら
(馬伏塚城主)大須賀康高(49歳)に城地検分の事を命じた。康高は最初三社山を城地に撰
んだが、ここは文武天皇勅願の宮地であることを聞き、これを冒すのを畏れ多しとして、西
まつおざん
方の松尾山を取り立てることに決し、浅羽にある馬伏塚の砦を移して、天正6年(1578)3月、

築城の工を起こした。㊟ 城普請は天正 8 年(1580)に至って大方出来、その年の 8 月、家康の高天神城攻撃が開始された。

註記㊟・・恐らく、三社山（権現山）への大規模で本格的な築城は断念したが、見張りの砦「横須賀砦」(本陣)などは、高天神廢城頃までは実在し、偵察目的に活用していたと考えられる。他に城地候補として、石津八幡山へ搔き上げ砦を、城北・小谷田せんようじ撰要寺の裏山(貴船山)きふねやまなどもあったといわれるが、家康の見立てで松尾山に決した。

かつて三河長篠に、織田・徳川の勢と戦いを交えて惨敗を喫して以来の武田氏の威信は地に墮ち、人心は次第に勝頼を離れ始めた。家康は高天神城周辺に六か所の砦を設けて、遠巻きにこれを攻めたので、武田氏が遠江国における唯一の拠点と頼む高天神城の支えも崩れはじめたが、勝頼は長篠敗戦以来の臆病が募り、35 歳の血気な身を甲斐国に置き、高天神の危機を救おうとせず、これを見殺しにしたため、翌天正 9 年（1581）3 月、高天神城は遂に孤立のうちに敢え無く陥ちた。

天正 2 年(1574)、小笠原与八郎(氏助、長忠、後に信興と改名)が勝頼に降ってから 8 年目に、家康は遂にこの城を奪還することに成功した。武田方に屈するのを潔しとせず、節を守って囚われ石牢に幽閉された先の城の監将(軍監)・大河内正局(政房)は、再び天日を仰ぐことができたが、その石窟と伝えられる場所が高天神城址の一隅に遺っている。(土砂崩落防止のため遺構は現在保護されている) 高天神山は、小笠郡土方村(掛川市土方嶺向)にある標高 220 メートルの山、鶴翁山とも呼ばれる。高天神城はその天嶮に構えた山城だが、築城の歴史を詳らかにしない。

高天神城を失って後、大勢の已に如何とも為し難いことを知った勝頼は、その年の 12 月、信玄以来の古府中の居館を自ら焼き、天目山を目指して落ち延びたが、麾下の逃亡する者次第に多く、織田・徳川勢の追撃は急であり、山僧もまた勝頼に反したために、翌天正 10 年(1582) 3 月、四十余人の一族と共に山麓の田野(旧大和村、山梨県甲州市)に自刃して遂に

その短い生涯（37歳）を閉じた。

横須賀城には東西二門の大手口があったので、両頭城^{りょうとうじょう}③の別称があった。この二門は、馬伏塚の城門と高天神城の城門とを移したものと伝えられる。

註記③・・・高天神城同様、二つの高い山の頂に主要な曲輪がある城という意味にも捉えることができる。小笠山支脈の末端に位置する三社山や松尾山、又は石津八幡山の二ヶ所に軍事的な本陣の拠点を持つ城（砦）とも位置的に解釈できる。また、東西に長く伸びた城の構えという意味にもとれる。（私説）

横須賀城の前身ともいえるべき馬伏塚の城主であった小笠原長高^{おがさわらながたか}（遠州小笠原家・初代）は、今川氏親^{うじちか}に仕えて三輪・岡崎・清ヶ谷・横砂（横須賀）の四村と浅羽庄^{えいろく}を領し、後の永禄11年（1568）、氏清^{うじきよ}（遠州小笠原家・3代目）に至って徳川家に属したが、天正2年（1574）、長忠（遠州小笠原家・4代目）が武田勝頼の軍門^{くだ}に降るに及んで、城は大須賀康高^{こも}の籠るところとなったが、高天神落城と共に廃城となった。その旧跡は、今の袋井市浅名の地一帯で、開墾や道路の開通などによって地形は変貌したが、明治の初頭まではその土塁跡が歴然としていたということである。この馬伏塚の砦が、横須賀へ移された時を以て城飼郡^{もつ きこうごおり}の名を城東郡と改めたと伝えられるが、既にそれ以前、永禄年間の今川氏真^{えいろく うじまね}の古状に「城東」の文字があるというから、この二つの名称は当時一定ではなかったであろうと推測できる。江戸時代の記録にも「城飼」の文字が見える。

家康の横須賀築城の本来の目的が、高天神城に対抗するためであったことには相違ないが、然し高天神城は、横須賀城完成後半歳^{はんとし}を出ずして呆気なく陥^{あっけ}ちている。そこで、家康の横須賀城に別の意図があったのではないかと考えられることは、この地が遠州灘に臨んだ良港^お④であったという立地条件がこれを物語る。

註記④・・・食糧や物資の供給地、流通経済の拠点地、交通の要衝地、地下水が豊富な土地で庶民が生活しやすい気候の土地であることなどが考えられる。

横須賀湊^{みなと ほうえい}は宝永4年（1707）10月の大地震によって塞^{ふさ}がり⑤今では一眸^{いちぼう}の墾田^{こんでん}となっているが、正保年間（1645年頃）の『横須賀惣絵図』^{しょうほう よこすかそうえず}で見ると、城前から浦川一帯にかけて入り海になっており、名にし負う遠江灘（遠州灘）七十五里の荒磯の中央に位置しているので、荒天時には船舶の避難所であったことから「姥が懷^{うば ふところ}」の名を生じたと伝えられる。「駿

遠三国地図」に、

横須賀湊口^{みなとぐちひろさ}広一丁^{とおあさなり}遠浅也。^{ふなみち}船道二十間^{にしかぜつよきときふねい}西風強時不出船。

とありました。また、

湊より伊勢桑名へ四十八里、駿河清水へ二十四里、伊豆下田へ三十里・・・。

などとあって、往時の海運^{いんせい}の殷盛^{うかが}の様が窺われる。

註記⑤・・・原野谷川や太田川の治水工事、大雨や洪水対策の堤防工事が整備されたため、上流からの横須賀の入り江へ流れ入る水量が大幅に減り、また太田川や天竜川等からの大量の土砂が沿岸への流出と滞留の影響で湊口が閉塞したと考えられる。

城北にある知恩院末撰要寺を景江山と号し、その丘麓^{おかふもと}は昔の姥ヶ懐^{うばがふところ}であって、ここに

碇泊^{ていはく}する船舶に浄水を供給した船井戸^{ふないど}®を昭和時代まで遺し、柏木の地名の元は河岸揚げに由来するとも言い伝え、いずれも往時このあたりの入り海であったことの名残である。

註記⑥・・・撰要寺の北、貴船山北麓^{せいがや}の清ヶ谷^わにあったという湧き水、澄んだ水の池があったというが、平成時代の道路工事により現在は位置も判らない。

横須賀初代の城主として大須賀康高が封ぜられたが、康高は天正16年(1588)6月23

日、62歳で没し・・・「藩翰譜」はこれを17年とする・・・嗣子^{しし}が無かったので、女婿^{むすめむこ}の

榊原康政の長男・国千代^{くにちよ}(後の忠政^{ただまさ})が大須賀家を相続し、第2代城主を継いだ。

この頃城に天守櫓が建ち、城下に町屋普請をする者には竹木(建築材料)を与え、奥行き十六間、間口望み次第の地所を取らせ、年貢諸役の末代免許が仰せ出されたと伝えられている。

天正19年(1591)8月、忠政は上総久留里^{かずさくるり}(千葉県君津市^{きみつ})へ移封^{いほう}し、その後を承けて

同じ年9月、第3代城主として渡瀬左衛門佐繁詮^{わたせ さえもん のすけしげあき}が入部したが、在城中に暴政が多く、領

民は大坂(大阪城)に訴えた廉^{かど}を以て数十人^{もつ}を斬首^{ざんしゅ}したということが伝わっている。

文禄4年(1595)7月、関白秀次事件^{かんぱくひでつぐじけん}で与党判物^{よとうはんもつ}に署名^{しよめい}の罪^{かいえき}があつて改易^{さたけ}され、佐竹

右京大夫義宣^{うきょうだゆうよしのぶ}(常陸国54万石領主^{ひたちのくに})の京都屋敷にお預け後、関東流罪になったと伝え、古

文書などにより、上野国(又は信濃国)^{こうずけのくに}碓氷峠^{しなののくに}、下野国宇都宮^{うすいとうげ}(栃木県宇都宮市^{しもつけのくにうつのみや})、常陸

国(茨城県)にて自刃あるいは断罪になったことになっている。⑦ 何れにしても在城僅か5

年の任期であった。

註記⑦・・墓地墓石、さらに位牌の存在が確認されていないが、「佐竹家譜」内の註記・古老の話よりの記載事項として、佐竹氏の移封地・奥州秋田城下の聲躰寺に葬られたと記されているが、私的には生存説が否めない。

渡瀬左衛門佐が、尾張清洲城主の関白・豊臣(三好)秀次に加担した咎めであると伝えられている。太閤秀吉に嗣子である秀頼(幼名・拾丸)が生まれ、甥の秀次の存在が邪魔になったので、高野山へ追放にしたが、思いがけず自刃したため、事件が大きくなり、隠蔽のため近習の者を処分し、妻子ら30名を京都三条の河原で公開処刑したともいわれている。

渡瀬左衛門佐については別に挿話がある。それは城北の撰要寺山内にあって古来、耶蘇燈籠の名で呼ばれている一基の織部式燈籠にまつわる伝承で、この燈籠は吉利支丹(切支丹)弾圧の厳しかった時代に作られた耶蘇の秘像、所謂潜伏吉利支丹の遺物であることが後に判明したが、寺伝によるとこれは渡瀬左衛門佐がこの城を去るに臨んで、豊太閤(豊臣秀吉)から拝領の千利休遺品の茶の湯道具と一緒に密かに寺へ贈ったものだといっているのである。渡瀬左衛門佐は、吉利支丹大名といわれる摂津国高槻(大阪府高槻市)の城主・高山右近との交流があったということである。(撰要寺の前住職泉敬常師の話として、燈籠は江戸時代まで竿部が地中に埋められ墓地に隠されていたと伝えられている。)

文禄4年(1595)7月、渡瀬左衛門佐追放の後へ、第4代城主として渡瀬の義弟(妻の弟)で家老職の有馬玄蕃頭氏長(移封後に豊氏と改名)が、渡瀬家臣団をそっくり汲み入れ継承した。慶長6年(1601)、関ヶ原の合戦では東軍・徳川方に従軍し、勝利を受けて後に故郷に近い丹波福知山(京都府福知山市)へ転封となったが、在城6年の間に領内の検地を厳にし、5000余石を打ち出し、ために田地狭まって百姓が困惑したという悪政の一端が伝えられ、この事以来、「玄蕃縄」や「玄蕃桶」の俗諺が巷間に伝わるようになった。慶長5年(1600)

6月、氏長は家康の養女連姫(17歳、その後「遠州殿」と呼ばれた)と結婚する。連姫の父は松平(長沢)源七郎康直で、この時すでに嗣子無く死去していた。生母は家康の妹・矢田姫であった。これは五大老五奉行が定めた「御掟」第一条で禁止されていた私婚の禁止が、家康により公然と違反された。その後9月15日に関ヶ原の役があり勝利し、ここに徳川氏覇権は決定的なものとなった。

慶長6年(1601)9月、第5代城主として松平(大須賀)忠政が上総久留里より帰封し、領民はこれを喜んで金谷や島田あたりまで出迎えたといわれるが、慶長12年(1607)春、忠政は病を得て上洛し、療養中の9月京・伏見で没したので、その嫡子・国千代丸(3歳。生母は家康の異父弟・松平〈久松〉因幡守康元の三女。)が第6代城主を継ぎ、後に実名を忠次と名乗った。この頃の横須賀城下町屋は、本町以西の町並みが完成したとされる。元和元年(1615)12月忠次は家康の命により、父の実家・榊原家継承のため一部の家臣を伴って上野館林(群馬県館林市)へ所替えとなった。康高・忠政・忠次の三代を通じて前後31年この地を領し、城東郡下の大小寺社領は、この三代の寄附によるといわれる。この年、駿遠55万石の松平(徳川)常陸介頼将(家康の八男。後に頼信、頼宣と改名)の所領となり、旧大須賀家臣団が汲み入れられ、第7代城主(駿府城主が兼任。城代として傳役兼附家老の遠江掛川城主・安藤直次が出仕。)とするが、元和5年(1619)7月、頼宣が紀伊国和歌山城主になるに及び、横須賀の家臣悉く召し連れたと伝える。これが紀州家で、尾張家、水戸家と並び徳川御三家といわれて重きをなした親藩の一つである。元和5年(1619)10月、松平(能見)大隅守重勝は上総関宿(千葉県野田市)より入封し、第8代城主となり駿府城代を勤めるが、翌年12月没す。嫡子丹後守重忠が、家督と駿府城代を相続し第9代城主となったが、元和7年(1621)11月、親族の鳥居忠政らと共に最上氏改易後の遺領(山形)へ東北の抑えとして出羽上ノ山(山形県上山市)へ転封する。翌12月に第10代城主として井上主計頭正就が横須賀城を領することとなったが、江戸老中職(将軍秀忠附老職)ゆえ江戸在勤のため、遠江横須賀へ入部せず、寛永5年(1628)8月、江戸城西の丸で没し、長男の河内守正利が家督を継ぎ、寛永11年(1634)6月、第11代城主として初入部するが、家中(家臣団)が多く、江戸より大勢引っ越してきたので、大淵村(現在の西大淵地区)の百姓屋敷並びに安楽寺、梵音寺、円福庵の寺院を引越しさせて、一番町・二番町・三番町の侍

やしき しょうほう あしがるちゅうげん まちかたにんそく そうぼり
屋敷(武家屋敷)を作り、正保元年(1644)には足輕中間・町方人足を使って城の総堀を掘り、

石垣や建物を築くと伝えられ、西大谷川河原を上より下へ深く掘り割った。町屋は、寛永1

1年(1634)に新屋町以東の十六軒町、河原町まで完成した。井上氏は父子23年の間この城

を領し、正保2年(1645)7月、常陸笠間(茨城県笠間市)へ移封となった。実は同年2月、

正利の義兄(姉の夫)で、三河岡崎(愛知県岡崎市)の本多伊勢守忠利が遠江横須賀への移

封が告げられたが病気で延期されていたが病没し、嗣子の石見(11歳。後に越前守利長)

が三河岡崎城主となったが、年少のためこの6月に横須賀へ移封と決まったが、江戸屋敷に
在り、当初は家臣団のみ横須賀へ引っ越してきた。承応2年(1653)6月、利長18歳で初め

て入部したと伝える。本多利長在城38年の間に、枕町・小姓町・小谷田等へ侍町を作り、

大工町と中町北に馬場を作り、石津西に足輕町を立てた。(小姓町は大須賀中学校南方、中

町北は中本町北の愛宕下を指し、ここを馬場町と呼んでいた。)

城内では二の丸普請(御殿)の完成したことを「郷里雑記」が掲げており、更に、

…本多越前守利長様御世盛りには、北の丸、西の丸とて結構に御普請被成、京都より上郎

衆御兩人上下七、八十人の御付きの衆有て、賑々敷御身代能き御城主なり…

と誌し、「藩翰譜」には、

…利長身の行ひただしからず、領地の治めもあしかりしば、つひに公にきこえ、天和二
年(1682)二月二十二日 領地ことごとく没収せらる。…

とあって、出羽国村山郡(山形県村山市)へ新封1万石(父祖三代の功績により)にて左遷

(除封及び新封給与)され、元禄5年(1692)11月、58歳を以て儚く没したことを述べて
いる。

他方本多利長は、在任中に西大谷川の改修や十内圀(埋樋)の貫通、さらに浅羽庄の大圀

築堤、次いで稗原築堤(柳原堤)の完成など、領地開発に貢献した事蹟の見るべきもの多

く、後世永くこの業績を讃えられている。

本多利長の後を承けて、天和2年(1682)4月、西尾^{にし おおきのかみただなり}隠岐守忠成は信濃小諸^{しなのこもろ}(長野県小諸市)

より領地2万5千石にて入部。第13代城主となり、子孫185年の永きに互^{わた}ってこの地を

領したが、その間天和3年(1683)湊口^{みなとくちじょうじゅき}成就祈願のため、今沢新田の八大龍王弁財天社(水門神社)の復興、享保9年(1724)、三社権現(三熊野神社)境内玉垣の完成など篤信の功も多く、

また意を民衆に用い、荒蕪^{こうぶ}を開拓し、製塩・製糖等殖産の事蹟の見るべきものまた少なく

くない。西尾氏はここに八世継ぎ、第20代城主・忠篤^{ただあつ}に至って安房国花房^{あわのくにはなぶさ}(千葉県鴨川市)へ転封の半途において、王政維新や版籍奉還を迎えて廃城となった。

西尾家の領地三万五千石の内訳は、次の通りである。

小笠郡 一万一千七百石 笠原・三浜・三俣・大坂・中・中方・岩滑・横地・

平田・池新田・千浜・曾我・和田岡・原谷・西山口・東山口・原泉・上内田

磐田郡 八千六百六十五石 幸浦・東浅羽・上浅羽・久努・笠西・中泉・於保・福島・
長野

周智郡 一千七百十七石 山梨・森

志太郡 二千九百八十四石 青島・六合・葉梨・岡部・朝比奈・因幡・高洲

このように横須賀城は、王政復古(更に大政奉還)と共に二百九十年の命数を絶ったが、

明治3 庚午年(1870)に書かれた『横須賀巡廻記』の中に、

…御堀にそよぐ青稻や板橋越ゆる御城内、天子矢倉^{てんしやぐら}の姿もやつれ、木戸も番所も関もなく自由次第に近道を…

とあるのを見ると、この頃、既に濠の一部は稻田となり、番所などは取り除かれ、城内も解放

されて通り抜けも自由になった様子で、天守閣(四層四重の天守櫓、地元民は「おてんし」と呼ぶ。)が荒廃しながらもまだ残っている様子がうかがわれる。以来、春風秋雨八十余年

(昭和33年時点)、城濠は埋まり、大手の古松はいま一本も残さず、隅櫓^{すみやぐら}(太鼓櫓、太鼓堂^{たいこどう})

と不開門跡の土壇落莫^{どだんらくぼく}としてやがて失せなんとし、本丸・三の丸跡は耕転^{こうてん}(茶畑等へ転作)

の侵すに任せてかつての殿舎(御殿^{でんしや})の在処は探るすべもない。街道は用捨なく旧城内を東

西に貫き、路傍^{ろぼう}に遺る三日月池に淀む水も侘^{わび}しく、このあたり昔土居^{むかし}の内であったことか

ら人呼んで中土居（お土居）という。城内最高地の天守台跡も、蓬生の丘となって栄枯盛衰の衰れをとどめていたが、この場所には昭和31年(1956)春、筆者(原文筆者の加藤貞雄氏)が設計に携わった忠霊殿(県立横須賀高校北の山頂に移築されて現存)の建築が完成したり、旧天守台への参拝通路が新設されたりしたので、明治初期の往時より多少形態を改められた、と記されている。

旧城内東端(会所跡は現在の妙徳寺辺)に、明治末葉まで一叢の松の木立があり、ここは藩学問所跡といわれたが今は跡形もなく、御作事(御作事長屋は旧浦野屋酒店付近)、下台所あたり(佐藤病院の道を隔てた一帯南側)にもその面影はなく、うたかたの世の移り代わりが忍ばれるのみである。(昭和33年・1958年現在の状景)

その40年後の平成10年(1998)頃までに主郭部が大きく整備されました。

原文執筆者の加藤貞雄氏は、晩年広島県三原市へ移住され、昭和34年(1959)7月に亡くなられ、遺稿となりました。

「遠州横須賀城の編年」は、昭和33年(1958)10月に遠州地方の郷土史研究資料を集めた『土乃以路』(土のいろ社刊)に掲載された加藤貞雄氏の原稿です。その資料を基に令和4年(2022)現在、補足情報を一部盛り込み、ふりがなや()を使い加筆及び修正をしました。原筆者の加藤氏は、横須賀城主・西尾隠岐守の家臣の末裔で、自身は国家公務員退官後ここ遠州横須賀を中心に古瓦・古建築や民俗研究等史料作成に活躍された方です。横須賀城の面影がまだ残る時代を御存知な方と思われ、よく調べられ、簡潔によくまとめられていたので、これを原文とし原稿を作成。投稿いたします。